

俳諧天尔波抄

三四

中村俊定文庫

文庫 18

742

2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6



俳諧天尔波抄卷之三



○十九家

○曾家

子

凡<sup>レ</sup><sub>レ</sub><sup>レ</sup>...

...

...

古今集...

...

...

...

集  
録の二見。……  
かきとある。宿。……  
ふ。……

春

柳よふ。……  
この句。柳よふ。……

炭

年。……

智月

集 日 荒 日 春 冬 炭 日 猿

拾の二見。……  
かきとある。宿。……  
ふ。……  
人の鶴と鶴。……  
秋。水。……  
猿。……

こねていづねも、シヤブとては倍倍よくあつたか  
申すも、シヤブとせば、いづれもあつたか  
物にあつたか、いづれもあつたか  
は、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
よれど、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
といふ、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
か、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか

○オニ　ういづら

ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか

荒　　ういづら、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
けつと、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
おつと、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
あつと、いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか  
いづれもあつたか、いづれもあつたか

集

秋より、隣りもあつたか、いづれもあつたか

芭蕉







Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is arranged in several lines, starting with a large initial letter. The script is dense and characteristic of the early modern period.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It begins with a boxed-in initial letter. The text is written in a consistent hand across the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It includes a section with vertical Japanese text:   
コレハかゝるト云フ經トノ  
コカレニテカクハナルナリ  
This section appears to be a commentary or a specific part of the letter. The main body of text continues in the same cursive hand.











春

傾城記とくくはあけがの 昌佳

○まじげのころあまぎ河は果しる例ありんをさるたごわまじり  
かりいづまの思の河をくりて海にたみくをど

猿

福の花これを俳のまげニセか 智月

炭

枝がくけぬか持と枝か 湖春

菫

先いへん枝と上のま上ごもり 芭蕉

日

里うすむゆべはるのさ上り上か 吟水

日

比庵の墓品川ニテ人ニ別ル秋のこれ 文輝

日

まじりて金音ま音と雨上回上か 無洞

日

おのけり思るのさ思る思と思ふ思か 圃燕

日

りへんや野路のね思ふ思秋の風 山川

日

低きけり上く上ま上お上ぎ上と上ゆ上へ上か 拙妖

日

まじりて花を牡丹のま上じ上り上か 全峯

員

辰の月利上ま上る上川 秋の風 新了

炭

枝れり三月三を三子三供三の三より三所三か 利牛

猿

おほり有て有る有白有濁有り有る有る有り有か 支考

日

ま有じ有り有て有る有土有口有次有が有心有を有る有る有る有り有か 其用

日

花神ず神る神大神り神あ神ら神と神る神つ神り神か 肖若

冬

寅のり乃あ大ら大と大銀大治大の大と大越大か 芭蕉

日

柳ナ柳ナ山ナあナのナ体ナとナおナまナるナか 其用

日

枝スのスあスやスこスのス一ス節スとス露スのスとス 其用

日

硝明壺明や明さ明る明ふ明あ明と明な明の明月明 芭蕉

日

ま大じ大り大と大大大事大し大り大か 日

日

細カ賣カのカ七カつカりカとカまカじカりカとカ 日

炭

細賣の七つカりカとカまカじカりカとカ 日

こゝろに... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...

○又この... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...

徳 足 綱 糸 大 料

荒 上 秋 の お 水  
炭 雀 の 枿 袴 西 半

上の... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...  
... 思ふ... 天の波... 昔を...

集 世 蓮  
日 書 床 の 山 日

つら... 思ふ... 天の波... 昔を...



志人むくのりかたのあはれなるものなり。人の心は、  
 かこいふことなかり。かこいふことなかり。かこいふことなかり。  
 の二例あり。はなむし

日 秋のやまのすさむらうごく答 子尹  
 日 名月や新の寺の茶のありき 羅房  
 日 やぐらひあふくみすねのそと 芭蕉  
 日 まじりやゆりさるるく 花の鳥 半残  
 日 海人のるく小油走らまはるいづか 芭蕉  
 日 初づかき鶴あつる回のさうらゐ 月友  
 日 ともやや整ふまゝくまの夜は月夜 日  
 日 春も三月あけほりく空 野水

日 市中ともものけりや夏の月 凡兆  
 日 ひらひらはものつとがぶれくさす 智月  
 日 花をさふくく花のかよひとさ 凡兆  
 日 さくらめとらふく花のつぼむ時 吉米  
 日 今もせいのひらや冬の輪 丹葉  
 日 山ぞとるあまのさるくはれを 芭蕉  
 日 一すげく花野の道 烟 鳥栗  
 日 花道は年のもとの三所外 百歳  
 日 三日かゝ草のやうの切よくり 芭蕉  
 日 穂くうめく其のさくはれ 跡香  
 日 時くも水も流るり 川 柳 志元  
 日 暖くもさるるはれく 旅 松安 我客









Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a single column and appears to be a formal or official communication.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a single column and appears to be a formal or official communication.

猿 合被の木乃

の字のついで

炭

雲を炭とくさくさゆくもなるぞ

野坂

日

このくさくさゆくもなるぞ

杉風

春

花ニ枝のひらきもなるぞ

山人

前句「むさぼりよきぬ」の「あつ」は「あつ」の冬文  
レラ前句ノ絹ニアタリテもトイルニアフズ。花ノ敷ヲ  
思ハセタルナリ。アハク心エナバ前句ノ絹ニアタレルヤウ  
ニオモハルベケレバ并シオクナリ

猿

ふるふも鼻つふあつす

九兆

炭

鬼のうらみをさすもひいかた

如竹

員

みよしうしこ身記何の所認を

胡及

瓢

文殊の智恵も樂特が思慮

山人

猿

百姓もまよらぬけく茶持奇

生来

統

人の氣もかく寝てくさく

法池

猿

若楓葉もなるぞ

曲水

日

君が作やつとも祭も錦ひとも

山人

日

人よ似く猿もまよるぞ

除頭

統

茨もくさくさなるぞ

荒雀

炭

このけくさくさなるぞ

不祥

日

まよこのまよるぞ

野坂

猿

衰もくさくさなるぞ

世角

日

初ぐれ猿も小叢をりげ

世蕉

日

くさくさなるぞ

猿難

炭

狭河路や花もなるぞ

世蕉

春

まよくさくさなるぞ

野水

荒

珠の葉のこれとまよるぞ

路通





とあるものなり

員 高しむみかまのむす一より 野水

とあるもの創なり... 又あるもの... 片の... 〇... 炭

炭 牡丹すく人もや花ア...

〇... 牡丹すく人もや花ア... 〇...

三

〇... 〇... 〇...

〇... 〇... 〇...

〇... 伊... 〇...

〇 仁家



2  
いふはなはる物と云ふものにて持てゐるは  
詞かりしとて詩なりとの擧げたる人の所かゝる詩なりとのみ  
あつた詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
くさなりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの

続

まじりゆくもの花はあがりて

車来

目のかゝるものなりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
あつた詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
あつた詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
あつた詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
あつた詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの

炭

まじりゆくもの花はあがりて

轉る

山

いふはなはる物と云ふものにて持てゐるは  
詞かりしとて詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
あつた詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
あつた詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの  
あつた詩なりとの擧げたるものなりとの擧げたるものなりとの

炭

約束よみくわぬが較より

雪良

続

縁ぬのいもの花はあがりて

曲琴

春

初ゆきの若葉のよりに木杵をて

春号

炭

うりもの物さるうたのぬの月

其角

続

味管部をほろひて肥る三並の

夕可

日

揺栗や縁よやとくづるのちり

沾圃

荒

うさきや臍の縁よまきとのちり

芭蕉

冬

雉子さりの鳥帽子の女五三十一

野水

員

大根はがみくほりよりのちり

若子

続

糸の糸よ小路のげとせのちり

沾圃

員 里 遠く 踊 を し け ん 二 三 日 狂 水  
日 づ いた け ん の し なる 精 進 狂 水  
日 秋 風 の 女 車 一 の 夢 男 恋 河  
猿 落 の 芽 だ り の け 帳 ち り ち  
日 竹 の ま や 畑 隣 の 思 大 郎 草 木  
員 人 並 び の ま だ け け け け 釣 雷  
猿 枇 杷 の 古 舞 臺 木 芽 り ち り 史 邦  
日 初 雷 一 聲 神 倉 の ぞ け 初 狂 日  
炭 煙 一 ぞ 薪 を 灰 多 け け 砂 披  
続 大 千 十 袴 の ド ン 子 圓 ち り 惟 就  
炭 隣 一 の 小 言 せ れ ば 是 狂 日 野 披  
夏 喜 々 玉 子 なる ぬ 玉 子 一 文 に 野 水

日 血 刀 け け け 月 の け け 赤 け 行 舟  
春 傘 の け け け 雨 の け け 赤 丸  
員 ち 川 舟 や け け 相 の 木 に 雪 水  
日 け け け け け け け け 木 格  
日 魚 け け け け け け け 日 湯 籠 に 日

これら皆倒句のになり。又これらは何れも秋であらうかあり  
猿 新 雪 姿 け け け け け け 日 け け 秋 水

これを倒句とあらば倒句なるべし。上と二事よかけり。けけ  
なすとの倒句にけけと定むるなり。前句「けけ」の音に  
秋 芭蕉 後句「けけ」の音に「まき」の音はけけに  
け け け け け け 倒句なるべし。けけけけ  
○よけけけけにあり。けけけけけけけけけけけけ

日之非やぐらふ河原をさうさうあふむいとせむもさしりりあひ

続 さよふきり庚申一らのふを形。大草

○まはるにさうさうのふをたがひのふさうさうの事いふなり  
これま前のふをたがひのふさうさうの事いふなり  
てかんさうさうの事いふなり

瓢 この村入ひりりやうの醫者のふりり 芥子

日 虫れこのころは用このころの事いふ 乙州

日 かまのふさうさうの事いふ 釣棚 故人

集 木曾の渡りさうさうの事いふ 後の月 芭蕉

○さうかひりりあひさうさうの事いふ  
まはるのふをたがひのふさうさうの事いふ

続 くれちぬへさうさうの事いふ 活版

集 杵がさうさうの一字あひりり 芭蕉

下けさうさうの事いふ 雲 稲 稲屋

おろがやさうさうの事いふ 江戸の月 里菜

庭さうさうの事いふ 身 身 男房

銀さうさうの事いふ 月 月 芭蕉

船に西國武士のふの事いふ 船 船

挑灯の事いふ 挑灯 挑灯

孫さうさうの事いふ 孫 孫 良品

傘さうさうの事いふ 柳 柳 芭蕉

さうさうの事いふ 柳 柳 支考

かぎりさうさうの事いふ 柳 柳 市柳

日 荒 一品

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

日 小川に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり  
 日 舟に記のり

舟に記のり  
 舟に記のり  
 舟に記のり  
 舟に記のり  
 舟に記のり  
 舟に記のり  
 舟に記のり  
 舟に記のり  
 舟に記のり  
 舟に記のり

つづくは土ごあずる本曾路か 後略



日 戸でかしらみー居凡口のやぬ  
 日 ひろし合をど 表がへする 日  
 日 うしあまど市ーの申を押あふ  
 日 およひれまゝ 早編むやぶく 里圃  
 但テとりひるこの俗言のテの例であらざるありとわらひつゝいふこと  
 あまするれどもたゞ

炭 くれもろが縁紙すんで里くど  
 日 ちり枯あらしりもろに鏡をみる  
 日 清林すんで孝一 ぶすあする 活圃  
 炭 ひろしあまんでりあま 福くくる 柳平

コシラハイヅレモ。清音ノテナルガ。濁ルハ俗言ノナラニ  
 ニテ。コシラガイトイフトハコトナリ。古言ナラバコトナ  
 コシラガイトイフトイフ所  
 ナリ。コシラガハスベカラズ

徒 老のよぬあつとまろで 四十雀 芭蕉  
 日 総あやまもやどくよどす 五り雨 羽紅  
 日 めいけくもどるけいけい 松風  
 日 梅欄のやまよとまろでるる 胡蝶 梅餅  
 日 うごももみろどく 柳川やまろ 玄米

こけもろもろすべし 俗  
 言のテれんかろる例やまろにあらぐ

荒 ちりあやまのあまねく隣ど 路通  
 徒 ちりあやまのあまねく 淫靡像 吟水  
 員 ちりあやまのあまねく 小あまねく 行子

前白「コレはやすげは土ゆゑかワリ 逢河コノ  
白意ヲ見テテヲにクハテノ心ナリ」知ルベシ

炭  
髪おんとそ踏し〜する 思書る〜  
帷子と肩より〜らぬ 思書る〜  
肩衣と肩より〜ゆるせ光の反  
〜岸の松と花よりわりのら  
右に降り〜テ〜  
集 日 炭

右に降り〜テ〜  
○又上よ。何よ〜は〜何する〜と〜何する〜何する〜  
下の〜  
す〜  
冬  
とやの〜接まり〜  
正月  
杜回

月  
うがひすの踏〜と雪を〜と〜  
け〜と踏〜と丸太〜と〜  
景清〜と花見の〜と〜  
子供〜と〜と〜と〜  
〜と〜と〜と〜と〜  
月〜と〜と〜と〜と〜  
か〜と〜と〜と〜と〜  
初梅や骨〜と〜と〜  
〜と〜と〜と〜と〜  
〜と〜と〜と〜と〜  
〜と〜と〜と〜と〜  
集 日 炭  
馬黄  
鴛鴦  
芭蕉  
葛花  
鳥鳥  
水氷  
土草  
芭蕉  
半残  
荒蘭  
今宵の炭  
芭蕉









こゝろに

ト思フテなぞよもつて今いふく。同くもよもつて  
なぞよもつて。いふもなほなほ。いふもなほなほ。

員

弓川くは豚角力とく

泉

瓢

いふもなほなほ。いふもなほなほ。

西秀

僂

米搗もなほなほ。いふもなほなほ。

文秀

冬

とのが同のつど。いふもなほなほ。

野水

業

すゝもなほなほ。いふもなほなほ。

日

かひいふもなほ。いふもなほなほ。

猿

誰もなほなほ。いふもなほなほ。

印七

荒

上ヶ土よりの種。いふもなほなほ。

七寮

○オニ例 へのとトム

こゝろに。いふもなほなほ。いふもなほなほ。  
「吾もなほなほ。いふもなほなほ。」  
いふもなほなほ。いふもなほなほ。  
ヤウニトイフホドニ。いふもなほなほ。  
いふもなほなほ。いふもなほなほ。  
いふもなほなほ。いふもなほなほ。

僂

ふもなほなほ。いふもなほなほ。

合安

猿

いふもなほなほ。いふもなほなほ。

凡兆

炭

いふもなほなほ。いふもなほなほ。

芭蕉

口

いふもなほなほ。いふもなほなほ。

柳半

員

いふもなほなほ。いふもなほなほ。

久人

続	員	炭	日	日	猿	荒	日	日	日
くまのやまのさかき	つらつら	じんじ	さけ	どろり	まき	すく	すく	すく	まき
青雲	行	秋	酒	秋	史	泉	泉	角	葉
せき	り	校	中	月	和	和	和	和	和

○第三例

ふし... 我と人... 大と後...

荒	日	日	日	荒	続	猿	続	炭	続
山が	若	馬	灌	花	川	ま	代	け	あ
枝	水	鏡	中	文	日	日	日	日	日

馬毒極の毒



ついでに... 肺結核... 俗語...  
アロトノヨカニシテ集申例み成

○第六例

事のいづれに... 集申例

この三例のあり俗語よつよと二種あり

日 鶏がめがとやがく暮れ月 せ葱

何かに... 鶏がめがとやがく暮れ月 せ葱

○... 登伊の友知... 集申例み成

日 集 竹植るはら 藁とや

紙なめるは 雨の露

日 集 木成るはら へ綿















続 川鴨や 赤白しつゝの 磯掛 釣竿

瓢 秋の舟をさるる 浪の音 曲水

女 水の御門をぬけ 明けのま 芭蕉

あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉

○又よするのとあづけくノ如クもくろくもありの。いれは上吉  
よるまもまきくよしむし。物よもあつた。いれは上吉

春 陽炎のゆるゆるのりりるまぬはく 狂人  
表 雨の空どりの舞 迅速 狂水

員 ちりちりのびわくはあり女家 狂人

後 世中一と鶴鶴の尾乃懐く 狂人

○又よするのとあづけくノ如クもくろくもありの。いれは上吉  
よるまもまきくよしむし。物よもあつた。いれは上吉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉

あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉  
あはれなるよきことばの御門をぬけ 明けのま 芭蕉

日序	日	日	猿	日	猿	員	冬	炭	春	集	瓢
こねぐ序よこのくねくね	梅りよさゆくうがえ子いん	花しんるまへて西もがが衣もく	けよよと盧日ご男居なりけ	縁がゆいぬお祖又の借浅	おねづ事一そよよんく梅のやぬ	隊ぞいよぶとりいごさるふさ	口東のまやが梅よ月よんく	祖又がもの火桶もやんすをり也	ねのあゝさるが門もいりぬ	ちとりの雨や西施が合被の花	きんりり記の関さる
其角	尚白	芭蕉	史邦	馬寛	世彦	山人	市五	其角	雨相	芭蕉	其角

続	日	日	猿	炭	員	猿	員	瓢	猿	続
まをや光うりぬ又銀活が遊	おくとやや小町が骨のそよよ	山ぐつが東山子つてわくわく	おねがざり伊勢がお累よんし	いづももろが爪紅のこすちきりけ	高匠が櫻の小節を捨りぬ	そのづいさくくさるたのぞ麻	下雅が新あまうこぼしり	まのりが妻よおねくねして	ね白つくもぬ梅が早一ワど	摩耶ごころりゆいさきのこく
桃	釣巻	守五	其角	孫登	為守	凡兆	胡及	曲水	野水	支考

日 甲のよが 燕にぶあふるましれ 支考  
 日 小末も ちあ良のつづめや 飛治がみ 万字  
 表 五草や つまぬいぐさの 葉の 露 芭蕉

こほつゝいれりあはつていふにふつゝいふやあはつていふはのち  
 にとく信語の がかるまゝも 今此やよゝやくとくらく出まふつゝ  
 あめくかきし 雅俗の けりも ぞいふた まゝのつゝも ぞいふ かんた  
 て、うの上のあは 健男が あややくいふはつていふらるゝと 下りる け  
 しろしよのあはつるに 然らよゝい 信語を かのあはつていふ  
 いふれのと はつていふ この上よりいふ 然らつていふ 然らつていふ  
 のことがしやいふつゝいふ よくいふはよやく 然らつていふらるゝと 借  
 法もれども 今此のよやく 今の借法が ともなひ 又今の借法も ともなひ  
 うゝゝゝ 然るれど 然らつていふらるゝと 今といふはつていふらるゝと 今といふ

信語いづといふて 雅俗まど ありあつていふらるゝと 今といふ  
 炭 雜收の 鞍も せりや せりや 野城  
 日 時を 帰し ぬが 雨も 雨も 利平  
 日 馬が ともなひ ともなひ ともなひ ともなひ 振屋  
 続 花の けり 舞踏の 方が せりや 里園  
 日 舟が たり たり たり たり 馬つぎ 日  
 炭 祈が たり たり たり たり 野城  
 日 椿が たり たり たり たり 利平  
 続 夜あや やいひ 店く 月が 里園  
 日 山い げや 榎が 尻 振屋  
 日 ユ谷  
 こほつゝいれりあはつていふにふつゝいふやあはつていふはのち  
 りとく信語の がかるまゝも 今此やよゝやくとくらく出まふつゝ  
 あめくかきし 雅俗の けりも ぞいふた まゝのつゝも ぞいふ かんた  
 て、うの上のあは 健男が あややくいふはつていふらるゝと 下りる け  
 しろしよのあはつるに 然らよゝい 信語を かのあはつていふ  
 いふれのと はつていふ この上よりいふ 然らつていふ 然らつていふ  
 のことがしやいふつゝいふ よくいふはよやく 然らつていふらるゝと 借  
 法もれども 今此のよやく 今の借法が ともなひ 又今の借法も ともなひ  
 うゝゝゝ 然るれど 然らつていふらるゝと 今といふはつていふらるゝと 今といふ























日	日	猿	瓢	春	冬	猿	員	猿	荒	猿	日
柴より葉のあつさや葉のさ	すくすくや椽のまをさげ	竟よりあより酒をさ向せり	中国よりのかひ吉左左	くさよりもはあげさるまが	ほくがすのほよりうのう	秋より破のさきふりげ	岩の洞より花をゆる里	りより花をさる別して	あよりさくさくさのし	秋よりや田上山のく	りよりや葉のさより
前澤	支考	鹿内	惟和	山人	夫草	芭蕉	吟水	新号	石口	尚白	且紫

日	猿	日	春
學のあつげさくより	七より花をさる女中か	与力所よりさむら	鳥井よりさる奥の
式之	陽和	柳半	日

けりどまのさる。二例のさるのさるもあれどまのさる。ふか其師員外  
のさるよりまよりさるひやさる。まよりさるさる

○ 第二例 おくよりま

さくさく片がはさくさくはくさくさくさく  
さくさくヨリホカニとさくさくこれ又さくさく  
おくさくおくさくおくさくおくさくおくさく

一もの何にらん。花を寄せてくもく。今  
 こそ。何にらん。今こそ。花を寄せてくもく。

○第三例 みるよりト云

みるより。片方のまゝ。みるより。みるより。  
 まゝのまゝ。みるより。みるより。みるより。

炭 日 業 続

山より 吟 月 の やり 孫  
 ちの 四 大 舟 小 舟 舟 芳川  
 や 雀 上 下 や 時 外 芭蕉  
 深 下 り も 勢 多 多 げ 規 順礼  
 茅 の 結 や 風 吹 け り ち る 家 結通

続 炭 員 続 様 炭 日 日

林 藤 上 り 足 ぶ だ ち り 下 り 花 落 葉 外 一 そ  
 き ぬ ぐ や 結 の 事 下 り も 時 多 陰 向  
 い 川 下 り 多 十 月 の 夜 枕 隣  
 誰 下 り む とも 誰 へ 入 る 藤 松  
 區 下 り も 春 の や す 大 月 外 支 考  
 下 下 り や 下 下 り 下 下 り 百 合 の 花 乙 州  
 多 下 下 り の 花 や 下 下 り 秋 の 花 柳 笛  
 風 や 沖 下 下 り 下 下 り 山 乃 花 其 角  
 鮎 汁 下 下 り 下 下 り 下 下 り 下 下 り 芭 蕉

みるより。みるより。みるより。みるより。  
 みるより。みるより。みるより。みるより。

















炭

此のあらまに眩々ぐら

中夜

日

投らししをばらまきしや

夢

「まじく」まじりてかざし創みさす

○加天良家

**かて**

ご〜〜〜ま〜〜ま〜〜  
〜〜〜か〜〜〜ら〜〜ら〜〜  
〜〜〜又カ〜〜〜ん〜〜ん〜〜  
〜〜〜事〜〜〜ん〜〜ん〜〜  
〜〜〜みる〜〜〜ら〜〜ら〜〜  
信語のほど信るるに集申創みさす

佛借天尔彼抄卷之四終

